潮流

23. 7. 6

（社）日本獣医師会会長　倉吉動物医療センター・山根動物病院会長
山根　義久

リーダーとは

″それは君　大変おもしろい　君ひとつやってみたまえ″

これまでに青森県には幾度となく出掛けてきた。今年も既に3回訪問している。しかし、このたびの旅行は朝出掛けて、夕方帰京する慌ただしいものであったが、忘れることができないほどの格別思い出のある旅になった。

それは、5月26日、青森県獣医師会の通常総会に出席したときのことである。いつものことであるが、前日になり航空券の予約をしたところ、すでに目的の2便は満席とのこと。結局、早朝出発の1便で行く羽目になった。そのことが結局″災い転じて福となす″ことになったのである。

会議は午後からであり、それまでに3時間以上も予想しなかった空白の時間が生まれた。事務局の計らいで、浅虫温泉にある水族館に案内していただいた。見学中に″浅虫″という言葉をどこかで目にした記憶がよみがえってきた。

それは、50年も前のことである。多分、私が高校生か農業に従事していた若いころ、ある新聞に標記の言葉を目にし、切り抜きをしたことを思い出した。

新聞によると″それは君…″の一節は、東北帝国大学理学部付属浅虫臨海実験所（現・東北大学大学院生命科学研究科付属浅虫海洋生物研究センター）が大正13（1924）年に創設され、初代所長に就任された畑井新喜司教授（1876～1963年）の言葉である。

畑井教授は若い研究者に相談を受けたときには、何であれ″それは君、大変おもしろい。君ひとつやってみたまえ″という言葉を、いつも繰り返し発しておられたとのことである。その一言に若い研究者たちが、大いに勇気付けられ、元気付けられたそうである。

畑井教授が亡くなられた後に、恩師をしのび、教え子たちがその一節を刻んだ大きな石碑を実験所の庭に建立したというのが新聞の内容であった。

研究所の石碑を見たさに、タクシーの運転手に案内してもらって行ったのであるが、所内の誰もが忘却のかなたであったことには驚いた。皆で探したところ、結局石碑は草に埋もれていた。

その石碑は50年前に新聞で見たものとは大違いで、横に長いものであった。恐らく長い年月の間に台風か地震で倒壊し、再建立されたようである。

その当時新聞を見た私は、指導者や教育者は、自分の能力の限界を感じたならば、自分のこれまでの経験を生かして後輩たちの職場環境や研究環境をより良いものにする責務があり、そのことは当然のことと捉えてきた。もう一つのタイプがあるとするならば、何事も若い研究者の先頭に立ち、強力なけん引車になり得る人である。

私の医学部の8年間の研究生活は、両方の指導者に恵まれた。教授は最初のタイプ、助教授は2番目のタイプであった。後から考えれば、私は本当に良き指導者に恵まれていたと思う。

しかし、50代にして大学へ行き、15年間の大学生活で、それ以外に三つ目のタイプが存在することを知った。それは出る杭を打つことには努力が見られるが、育てる努力は全く見られないとんでもないタイプである。リーダーとはとても言えない。教育とは読んで字のごとく、教え、育てると書くが、事実は、教えられ、育てられの世界である。育てる前にこのことを念頭に置かなければ、真の教育は無理と思う。

今回の青森の帰りの機内は、至福のひとときとなった。

（東京都中央区）